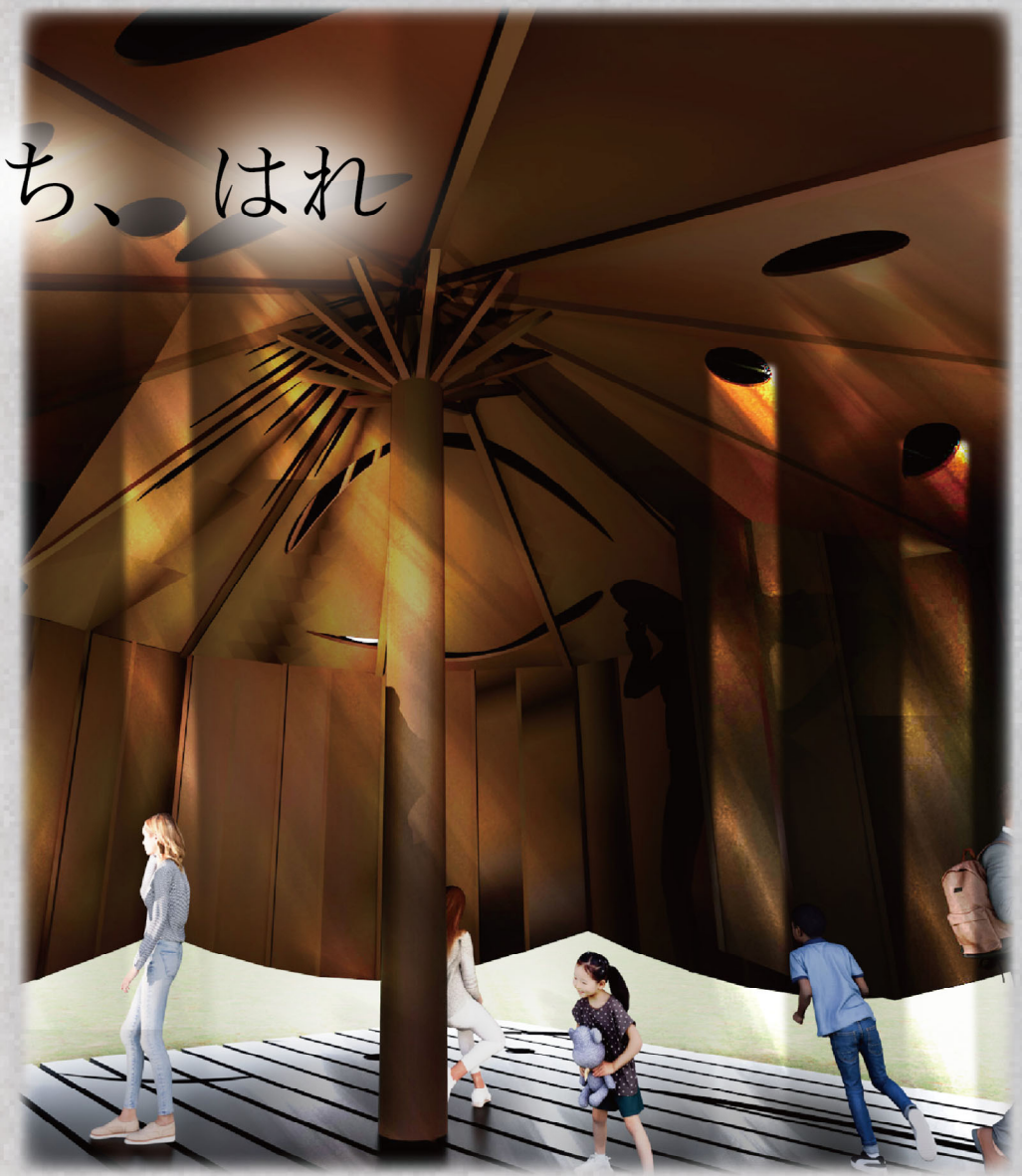
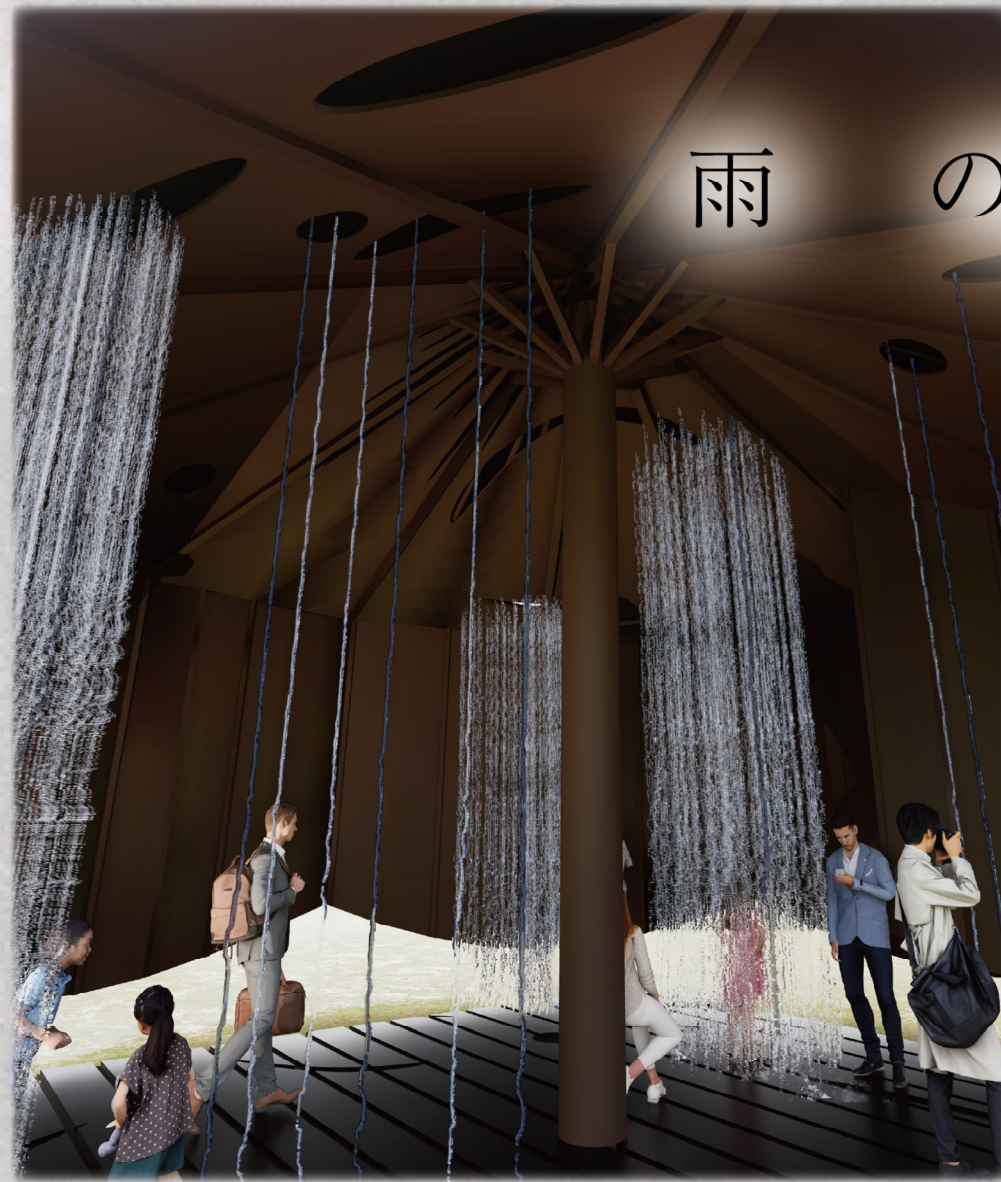


透水庵

雨と共に過ごし、光を待つ



雨のち、はれ

雨—私の感じた美しき「和」—

修学旅行で金閣寺を訪れた時、
突然雨が降った。



雨宿りをしている時、軒先から流れ落ちる雨水。
私は、雨の落ちる光景、水溜まりで水が弾く音に
心を惹かれた。

不完全—日本の美意識の根底にある侘び寂び文化—

雨は、和歌の題材として詠まれている。
この自然の変化を美として捉える考えの根底には、
「不完全で儚いものの中に美を見出す」という
侘び寂び文化が存在していると思う。



変化—雨による心情の移り変わり—

とはいっても、突然の雨は気分に影響を与えやすい。



まずは「濡れなくて良かった」
という安心感



次第に雨を視覚、聴覚で感じる
ようになり気分が落ち着く。



一方、静けさが内省の時間を与え、
天候の悪さに対して不満を抱く。



「侘び寂び」を感じられて、
雨宿りができる空間はないだろうか？

単なる雨宿りではなく、雨をより近くで感じられる空間があれば、
日本の美を味わうことができるのではないかな？

穴の空いた傘—雨を迎える空間—

雨宿りをしながら雨を楽しむ、「雨を美として迎える空間」を
実現するべく、私は敢えて穴の空いた傘に注目した。

穴から落ちる雨粒は、2つとして同じ形を持たず、
それぞれ異なる軌跡を持って降り注ぐ。

「穴の空いた傘」は、雨を完全に防ぐのではなく、受け入れることで、
雨の価値を再発見し、雨の日を特別なものへと変える。

不完全だからこそ生まれる考え

欠けているからこそ、見る者が想像を膨らませる余地がある。

固定しないからこそ、自然のリズムに従って変化する「生きた空間」になる。

全てを遮らないからこそ素材の魅力を活かし、調和できる。